

朗読 日本のことわざ
いろはかるた
(テキスト)

※ 朗読は別売されています。

しみじみ朗読文庫 編

あ

会うは別れの始め
青は藍より出でて藍より青し
仰いで天に愧じず俯して地に忤じず
青菜に塩
ああ世の中や苦爪楽髪
ああいえばこう言う
愛想も小想も尽き果てる
商いは牛のよだれ
秋の扇
秋の日は釣瓶落とし
明日は明日の風が吹く
合縁奇縁
悪事千里を走る
悪縁契深し
麻の中の蓬
相手のさする巧名
頭の上の蠅も追えぬ
悪に強ければ善にも強し
秋の鹿は笛に寄る
秋深き隣は何をする人ぞ
悪妻は百年の不作

朝雨は女の腕まくり
諦めは心の養生
朝のぴっかり姑の笑い
悪貨は良貨を駆逐する
後は野となれ山となれ
青柿が熟柿弔う
後足で砂を掛ける
過ちは改むるに憚ること勿れ
後の祭り
悪銭身につかず
新しい酒は新しい皮袋に盛れ
痘痕も靨（あばたもえくぼ）
朝に紅顔ありて夕に白骨となる
朝に道を聞かば夕に死すとも可なり
蟻の一穴天下の破れ
当たらずといえども遠からず
足下から鳥が立つ
赤子は泣き泣き育つ
明日ありと思う心の徒桜
相手変われど主変わらず
熱火を子に払う
危ない橋を渡る
垢も身のうち

空樽は音が高い
雨垂れ石を穿つ
網吞舟の魚を漏らす
鮑の片思い
鞍上人なく鞍下馬なし
愛多ければ憎しみ至る
東男に京女
頭は禿げても浮気はやまぬ
在りての厭い亡くての偲び
あちら立てればこちらが立たぬ
暑さ寒さも彼岸まで
余り茶に福あり
当たるも八卦当たらぬも八卦
雨降って地固まる
あの声でとかげ喰らうか時鳥
悪事身にかえる
秋茄子嫁に食わずな
あわてる乞食は貰いが少ない
鮫鱈の待食い
朝駆けの駄賃
悪小なるを以てこれを為すこと勿れ
案じるより団子汁
案ずるより生むが易し

糞に懲りて膾を吹く
明日の百より今日の五十
虻蜂とらず
阿呆にとりあう馬鹿

い

言うは易く行は難し
息の臭きは主知らず
異口同音
囲碁将棋菊づくりに女郎買い
石の上にも三年
一葉落ちて天下の秋を知る
衣食足りて礼節を知る
一富士二鷹三茄子
石が流れて木の葉が沈む
言いたいことは明日言え
一度は思案二度は不思議
石に漱ぎ流れに枕す
石橋を叩いて渡る
医者の不養生
交喙（いすか）の嘴
一匹狂えば千匹の馬も狂う

一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う
一方聞いて沙汰無し
一気呵成
鼬（いたち）の道切り
一言以ってこれを蔽う
一事が万事
一字千金
いつまでもあると思うな親と金
いずれ菖蒲か杜若
居候の三杯目
一敗地に塗れる
急がば回れ
痛くもない腹をさぐられる
鼬の最後屁
一押二金三男
一番風呂は馬鹿がはいる
一姫二太郎
いやと頭（かぶり）を縦に振る
一文惜しみの百知らず
一難去ってまた一難
家貧しければ良妻を思う
一挙両得
一刻千金

一刻千秋
一将功成りて万骨枯る
一寸先は闇
意見と餅は搗くほど練れる
一寸の光陰軽んずべからず
一寸の虫にも五分の魂
一斑を以って全豹をトす
一蓮托生
生き馬の目を抜く
いつ見ても暇そうなのは臍の穴
いつも柳の下に泥鰌はおらぬ
犬と猿世の中よかれ酉の年
鶺鴒（いっぽう）の争い
命あつての物種
一日の遅れは十日の遅れ
一芸は道に通ずる
乙夜の覧
以心伝心
犬と猿
犬の遠吠え
言い勝ち巧名
色の白いは七難隠す
一陽来復

命あつての物種
衣鉢を伝う
韋編三度絶つ
鰯の頭も信心から
言わぬが花
命長ければ恥多し
殷鑑遠からず
犬も歩けば棒に当たる
犬も朋輩鷹も朋輩
井の中の蛙大海を知らず
慇懃無礼
意馬心猿
往く往くの長居り
芋蛸南瓜
鼬（いたち）の最後っ屁
入るを量りて出ざるを制す
色に貴賤の隔てなし

う

魚心あれば水心
有為転変は世の習い
牛に引かれて善光寺参り

牛は牛連れ
氏より育ち
牛を馬に乗り換える
牛に対して琴を弾ず
牛になる合点じゃ朝寝夕涼み
嘘も方便
海千山千
馬も買わずに鞍を買う
内股膏葉
独活の大木柱にならぬ
烏有に帰す
鶉の真似する鳥
うまい物は宵に食え
馬と武士は見かけによらぬ
馬には乗ってみよ人に添うてみよ
嘘から出た実
鶉の目鷹の目
馬の耳に念仏
売り言葉に買い言葉
雲泥の差
浮世渡らば豆腐で渡れ
生みの親より育ての親
梅に鶯

売り家と唐様で書く三代目
瓜に爪あり爪に爪なし
瓜の蔓に茄子はならぬ
噂をすれば影がさす
歌は世につれ世は歌につれ
漆は剥げても生地は剥げぬ
雲散霧消
運は天にあり

え

江戸の敵を長崎で討つ
縁は異なるもの味なもの
榎の実はならばなれ木は棕の木
英雄色を好む
選んで粕をつかむ
易者の身の上知らず
縁あれば千里
江鮎の出世
栄耀の餅の皮
縁なき衆生は度し難し
得手に帆を揚げる
蝦で鯛を釣る

遠交近攻
猿猴月を取る
燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らん
偃鼠河に飲めども腹を満たすに過ぎず
縁の下の力持ち
鴛鴦の契り
縁の切れ目は子でつなぐ
遠慮は無沙汰

お

傍目八目
奥歯に物が挟まる
小田原評定
同じ釜の飯を食う
思い内にあれば色外に現わる
老いたる馬は銘を忘れず
負うた子に教えられて浅瀬を渡る
大風が吹けば桶屋が喜ぶ
おごる平家は久しからず
親の欲目と他人の僻目
負んぶすれば抱っこ
落ちれば同じ谷川の水

親の因果が子に報う
親はなくとも子は育つ
鬼の霍乱
鬼の目にも涙
鬼も十八番茶も出花
思い立ったが吉日
大風呂敷を広げる
老木に花咲く
鬼が出るか蛇が出るか
大使いより小使い
尾を振る犬は叩かれず
鬼が笑う
鬼に金棒
鬼の居ぬ間の洗濯
及ばぬ鯉の滝登り
起きて半畳寝て一畳
鬼の首を取ったよう
鬼の念仏
男の心と川の瀬は一夜に変わる
思い半ばに過ぐ
男は度胸女は愛嬌
踊る阿呆に見る阿呆
老いの一徹

負い目に負い目
逢うたときには笠をぬげ
同じ穴の貉
溺れる者は藁をも掴む
親の心子知らず
親の光は七光り
温故知新
お臍が茶を沸かす
尾羽打ち枯らす
帯に短し襷に長し
お前百までわしゃ九十九まで
臆病の自火に責めらる
御神酒あがらぬ神はない
大嘘はつくとも小嘘はつくな
女の一念岩をも通す
思う念力岩をも通す
親が死んでも食休み（じきやすみ）
親子の仲でも金銭は他人
親と月夜はいつもよい
親の意見と冷酒は後で大きく
親の意見と茄子の花は千に一つも仇はない
親の脛かじる息子の齒の白さ
泳ぎ上手は川で死ぬ

女賢しくして牛売りそこなう・
女三人寄れば着物の噂
女三人寄れば姦しい
女の心は猫の目
男心と秋の空
女やもめに花が咲き男やもめに蛆が湧く
親擦れよりも友擦れ
恩を仇で返す
終わりよければ総てよし

か

飼い犬に手を噛まれる
偕老同穴
柿が赤くなると医者が青くなる
蝸牛の争い
稼ぎに追いつく貧乏なし
風邪は万病のもと
会稽の恥
解語の花
蛙の子は蛙
蛙の面に小便
眼光紙背に徹す

顔色を見ずして多言を為すべからず
快投乱麻を断つ
華胥の国に遊ぶ
火中の栗を拾う
片腕で錐はもめぬ
隗より始めよ
臥薪嘗胆
苛政は虎よりも猛し
肝胆相照らす
花鳥風月
隔靴搔痒
河童の川流れ
勝てば官軍敗ければ賊軍
瓜田に履を納れず
蟹は甲羅に似せて穴を掘る
渴すれども盗泉の水を飲まず
金持ち喧嘩せず
河童の屁
桂を折る
鼎の軽重を問う
金は天下の回りもの
禍福は糾える縄の如し
果報は寝て待て

金の貸し借り不和のもと
金の切れ目が縁の切れ目
籠で水を汲む
我田引水
下問を恥じず
金のないは首のないに劣る
金は三欠くに溜まる
金は天下の回り持ち
垣堅くして犬も入らず
壁に耳あり障子に目あり
間髪を入れず
剃刀の刃を渡る
顧みて他を言う
鴨が葱を背負って来る
痒いところに手が届く
稼ぎ男に繰り女
烏に反哺の孝あり
画龍点睛を欠く
剃刀と奉公人は使しよう
亀の甲より年の功
烏の啼かぬ日と風の立たぬ日はあらず
借りるときの地藏顔
癩者（かったい）の瘡恨み

彼を知り己を知らば百戦危うからず
餓鬼も人数
学者貧乏
借り着よりも洗衣着
夏炉冬扇
河童の寒稽古
烏の請け合い
可愛い子には旅をさせよ
枯れ木に花
枯れ木も山の賑わい
邯鄲の歩み
邯鄲の夢
隠すより現わる
隠れたるより見わるるは莫し
堪忍袋の緒が切れる
管鮑の交わり
汗牛充棟
換骨奪胎
勘定合って銭足らず
火事あとの火の用心
艱難汝を玉にす
可愛さあまって憎さ百倍
寒に帷子土用に布子

堪忍五両思案十両
雁は八百矢は三文
韓信の股くぐり
株を守りて兔を待つ

き

聞いて極楽見て地獄
奇貨居くべし
危機一髪
金科玉条
聞くは一時の恥 聞かぬは一生の恥
雉子の浅知恵
九仞の功を一簣にかく
窮鳥懐に入れば獵師も殺さず
雉も鳴かざば撃たれまい
驚天動地
騎虎の勢い
疑心暗鬼を生ず
九牛の一毛
聞くは法楽
聞き上手の話下手
木で鼻をくくる

木に竹を接ぐ
木に縁りて魚を求む
兄弟は他人の始まり
虚名久しく立たず
桐一葉
木の実の本へ落つ
気は心
杞憂
九死に一生を得る
牛耳を執る
窮すれば通ず
窮鼠猫を噛む
槿花一日の栄
欣喜雀躍
昨日の友は今日の仇
金蘭の契り
器用貧乏
木仏金仏石仏
鬼面人を嚇す
渠成って水至る
漁夫の利
騏驎も老いては驚馬に劣る
金時の火事見舞い

今日の一針明日の十針
今日は人の身明日はわが身
清水の舞台から飛び降りる

く

臭いものに蓋をする
腐っても鯛
糞と見て踏むべからず
下り蜘蛛あれば人が来る
糞も味噌も一緒
口は禍の門
口と財布は締めるが得
食うだけなら犬でも食う
唇亡びて齒寒し
口も八丁手も八丁
口先の袴
喰いつく犬は吠えつかぬ
国に盗人家に鼠
愚公山を移す
国破れて山河あり
君子は交わりを断つも悪声を出ださず
蜘蛛の子を散らす

暗がりから牛
公事（くじ）三年
苦しいときの神頼み
腐れ縁は離れず
癖なき馬は行かず
君子危うきに近寄らず
君子は豹変す
葷酒山門に入るを許さず
群盲象を撫ず
愚者の一得
苦は楽の種
国破れて山河あり
暗闇の鉄砲

け

鯨飲馬食
鶏口となるとも牛後になるなかれ
螢雪の功
鶏群の一鶴
形影相争う
桂馬の高上がり
芸術は長く人生は短し

兄たり難く弟たり難し
喧嘩は降り物
怪我の功名
下戸の建てた土蔵はない
犬猿も主に従う
敬して遠ざく
外題学問
喧嘩両成敗
喧嘩過ぎての空威張り
芸は道によって賢し
鶏鳴狗盗
逆鱗に触れる
毛を吹いて傷を求める
涓滴石を穿つ

こ

恋は思案の外
光陰矢の如し
御意見五両堪忍十両
恋の遺恨と食べ物の遺恨
行雲疏水
後悔先に立たず

後世畏るべし
鯉の滝登り
口耳の学
子を視ること親に如かず
高木は風に折らる
紺屋の明後日
紺屋の白袴
呉越同舟
弘法も筆の誤り
弘法筆を扱はず
呉下の阿蒙
好事魔多し
口頭の交わり
恋に師匠なし
恋に上下の隔てなし
郷に入っては郷に従え
子を持って知る親の恩
狐疑逡巡
声なくして人を呼ぶ
光陰矢の如し
虎視眈々
米を数えて炊ぐ
故郷へ錦を飾る

小男の腕立て
虎穴に入らずんば虎子を得ず
五十歩百歩
壺中の天地
子はかすがい
転ばぬ先の杖
衣ばかりで和尚はできぬ
孝行したいときに親はなし
転んでもただでは起きぬ
鼓腹撃壤
田作（ごまめ）の齒軋り
子故の闇
胡椒の丸呑み
後家花咲かす
乞食に氏なし
乞食に貧乏なし
乞食は三日すれば忘れず
小股がきれ上がる
古木栄を発す
炬燵弁慶
凝っては思案に能わず
子供の喧嘩に親が出る
子は三界の首枷

小姑一人は鬼千匹に向かう
五風十雨
駒が勇めば花が散る
根性に似せて家を住まう
紺屋の明後日七十五日
言葉多ければ品少なし
今度と化け物には行き逢った事がない

さ

先の雁より手前の雀
先んずれば人を制す
酒なくて何のおのれが桜かな
猿の尻笑い
猿の水練魚の木登り
酒は百薬の長
三年園を窺わず
左祖（さたん）
五月の鯉の吹流し
鷲を鳥
猿が魚釣る
細工は流々仕上げを御覧じろ
触らぬ神に祟りなし

三度の火事より一度の後家
三顧の礼で迎える
昨日の少年今は白頭
雑魚の魚交り
山椒は小粒でもぴりりと辛い
坐して喰らえば山も空し
囁き千里
猿も木から落ちる
才余りありて識足らず
才子才に倒れる
盃に推参なし
去る者は日々に疎し
三尺下がって師の影を踏まず
三十六計逃ぐるにしかず
砂糖買いに茶を頼むな
三寸の舌に五尺の身を滅ぼす
鯖の生け腐り
去る者は追わず
酒酔い本性たがわず
三人寄れば文殊の知恵
秋刀魚が出ると按摩が引っこむ
三桂あって勝たぬことなし
三代続けば末代続く

三日書を読まざれば語言味なし
三軍も帥を奪うべきなり、匹夫も志を奪うべ
からざるなり
山門から喧嘩を見る

し

仕合せは三世の縁を二二世にする
詩を作るより田を作れ
色欲は命をけずる斧
思案投げ首
地獄の沙汰も金次第
鹿を追う者は山を見ず
鹿を指して馬と為す
小事は大事
地獄で仏に会う
獅子身中の虫
四角な座敷を丸く掃く
士族の商法
重箱の隅を楊枝でほじる
七歩の才
人生万事塞翁が馬
人間到る所青山あり

死馬の骨を買う
自業自得
四面楚歌
釈迦に説法
杓子定規
しゃべる者に知る人なし
猪食った報い
死児の齢を数える
猪も七代目には豕（いのこ）になる
親しき仲にも礼儀あり
疾風迅雷
櫛風沐雨
重箱の隅を楊枝でほじくる
守株
出盧
死屍を鞭打つ
正直の頭に神宿る
釈迦にも経の読み違い
蛇の道は蛇
秋霜烈日
十人十色
十年一日の如し
死に花を咲かせる

舌に塵をつけず
姑の仇を嫁が討つ
十目の視る所十手の指さす所
獅子の子落とし
上知と下愚は移らず
食指が動く
知らぬが仏
白羽の矢が立つ
尻馬に乗る
死人に口なし
人事を尽くして天命を待つ
人生行路難し
死ぬ者貧乏
笑中に刀あり
芝居蒟蒻芋南瓜
自慢高慢馬鹿のうち
自慢は知恵の行き止まり
疾雷耳を掩うに及ばず
下いびりの上へつらい
首鼠両端
城下の盟
蛇は寸にして人を呑む
沈香も焚かず屁もひらず

朱に交われれば赤くなる
児孫のために美田を買わず
出藍の誉
人生七十古来稀なり
春宵一刻価千金
春風駘蕩
順風満帆
地震雷火事親父
春眠暁を覚えず
将を射んとせばまず馬を射よ
上戸は毒を知らず
正直の頭に神宿る
正直は阿呆の異名
小人閑居して不善をなす
女子と小人は養い難し
日月は地に落ちず
掌中の珠
少年老い易く学成り難し
焦眉の急
白河夜船（よぶね）
洪柿の長持ち
心頭滅却すれば火もまた涼し
知らざるを知らずとせよ

順境は友を作り逆境は友を試す
邪剣な胸に鬼がすむ
真の闇より無闇が怖い
親は泣き寄り他人は食い寄り
心腹の友
人生意気に感ず
親切ずくが苦勞の種
知って問うは礼なり

す

水魚の交わり
推敲
粹は身を食う
過ぎたるは猶及ばざるが如し
据え膳食わぬは男の恥
雀海中に入って蛤となる
雀百まで踊り忘れず
酸いも甘いも噛み分けた
好きこそ物の上手なれ
雀の千声鶴の一声
好きには身をやつす
捨て児は世に出る

拗ね者の苦笑い
頭巾と見せて頬冠り
杜撰
水鏡私なし
水火も辞せず
するは一時名は末代
雀の涙
捨てる神あれば拾う神あり
翠は羽を以て自らそこなう
すべての道はローマに通ず
すまじきものは宮仕え
住めば都
相撲に負けて妻の顔を打つ
好いた者同士は泣いても連れる
随徳寺をきめる
寸鉄人を殺す

せ

晴耕雨読
切磋琢磨
青天白日
世間の口に戸は立てられぬ

世間は張り物
切齒扼腕
盛年重ねて来たらず
聖人に夢なし
青眼
青雲の志
精神一到何事か成らざらん
銭あれば木仏も面をかえす
雪隠で饅頭
千慮の一失
千慮の一得
善を責むるは朋友の道なり
青天の霹靂
積善の家に余慶あり
世情物騒わが身息災
善に強い者は悪にも強い
雪駄の土用干し
千金の子は市に死せず
清濁併せ呑む
清水に魚棲まず
千里行を留めず
せつない時に親を出す
背に腹はかえられぬ

千丈の堤も蟻の一穴から
堰かれて募る恋の情
清風郎月一銭の買うを用いず
前事を忘れざるは後事の師なり
千石とれば万石羨む
析薪を負う
前車の覆るは後車の戒め
前車の轍を踏む
梅檀は双葉より芳し
船頭多くして船山に登る
善悪の報いは影の形に従うが如し
千の倉より子は宝
善は急げ
急いては事を仕損じる
前門の虎後門の狼
前人木を栽えて後人涼を得
千里の馬は常にあれど伯樂は常にはあらず

そ

喪家の狗
創業は易く守成は難し
象牙の塔

糟糠の妻
創痕未だ癒えず
備えあれば憂いなし
滄海の一粟（いちぞく）
宋襄の仁
相談事は多分に付け
総領の甚六
空念仏も三合止まり
俎上の魚
底に底あり
滄桑（そうそう）の変
添わぬうちが花
粗相が御意に叶う
袖すり合うも他生の縁
その人を知らざればその友を
袖から手を出すも嫌い
その身正しければ令せずして行わる
損して得とれ
損の上塗り

た

大山鳴動して鼠一匹

鯛の尾より鰯の頭
鷹は飢えても穂を摘まず
多岐亡羊
代が変われば世が変わる
たくらだ猫の隣歩き
大海は芥を扱はず
大疑は大悟の基
大器晩成
大賢は愚なるが如し
大巧は拙なる如し
大勇は怯なるが如し
大勇は闘わず
太公望
大事の前の小事
多芸は無芸
竹の子の親まさり
叩けば埃が出る
ただより高いものはない
大隠は市に隠る
立ち寄らば大樹の影
立っている者は親でも使え
大欲は無欲に似たり
宝の持ち腐れ

玉の輿に乗る
竹屋の火事
竹藪に矢を射る
他山の石
玉の杯底なきが如し
玉磨かざれば光なし
大樹の下に美草なし
多勢に無勢
立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花
他人の疝気を頭痛に病む
他人は時の花
旅は道づれ世は情け
太盛は守り難し
蛇足
大廈成りて燕雀相賀す
暈の上の怪我
大器小用
多々益々弁ず
短兵急
だんだん良くなる法華の太鼓
断じて行えば鬼神もこれを避く
大行は細瑾を顧みず
大声里耳に入らず

立つ鳥跡を濁さず
立て板に水
鱈汁と雪道は後がよい
高きに登るには低きよりす
短気は損気
楽しみあらんよりも憂いなかれ
叩かれた夜は寝やすい
断金の交わり
伊達の薄着
男子の一言金鉄の如し
玉を抱いて罪あり
蓼食う虫も好き好き
旦那の一气働きは鬼もかなわぬ
暈の上の水練
男子家を出ずれば七人の敵あり
他人の空似
矯めるなら若木のうち
棚から牡丹餅
旅の恥は掻き捨て
卵に目鼻
炭団の目鼻
玉に瑕
卵を見て時夜を求む

断金の契
たまたま起きて猫踏みつぶす

ち

知恵者一人馬鹿万人
竹馬の友
茶腹も一時松の木柱も三年
朝令暮改
猪突猛進
父の恩は山より高く母の恩は海よりも深し
提灯に釣鐘
寵愛昂じて尼になす
知恵多ければ憤り多し
長者に貧を語るな
長者に子なし
痴人夢を説く
近惚れの早飽き
近火で手をあぶる
近きを捨てて遠きを謀る
池魚の殃い
提灯で餅をつく
長目飛耳

血で血を洗う
長舌三寸
中道にして廃す
長者の万燈よりも貧者の一燈
塵に交わる
頂門の一針
畜生の浅ましき
塵も積もれば山となる
忠言は耳に逆らう
近い者に金貸さぬもの
長者の娘も乞うてみよ
中流に船を失わば一瓢も千金
朝三暮四
散るは桜薫るは梅
珍客も長座に過ぎれば厭わる
地を易うれば即ち皆然り
重宝を抱く者は夜行かず

つ

搗いた餅より心持
使う者は使われる
月と鼈

月に雨がさがさがなし
鶴は枯木に巢をくわず
月に叢雲、花に風
月夜に釜を抜かれる
月夜の蟹は身が薄い
追従も世渡り
鶴の脛も切るべからず
作り大言
土仏が夕立に逢ったよう
漬物誉めるは媾誉める
杖にすぎるとも人にすぎるな
杖の下に回る犬は打たれぬ
使っている鍬は光る
綱渡りより世渡り
突っかけ者の人もたれ
月夜の蟹
角を矯めて牛を殺す
妻の言うには向山も動く
爪で拾って箕でこぼす
月夜に提灯
土一升到金一升
月を指せば指を認む
鶴の鶏群に立つが如し

面の革の千枚張り
辛い娑婆より気晴れの浄土
爪に火を灯す
爪の垢を煎じて飲む
月雪花は一度に眺められぬ
唾万病の薬
釣りする馬鹿に見る阿呆
罪を憎んで人を憎まず
鶴の一声
鶴は千年亀は万年
聾の早耳
作りごと公事（くじ）のうち

て

亭主の好きな赤烏帽子
泥中の蓮
敵は本能寺にあり
手前味噌で塩が辛い
出物腫れ物所嫌わず
天衣無縫
鉄は熱いうちに打て
亭主の前の見せ麻桶（おごけ）

天長地久
梃子でも動かない
手功より目功
天に二日なし
敵なきに矢を放つ
出方なしの入り方知らず
手鍋を掲げる
出る杭は打たれる
手習いは坂に車を押すが如し
手書きあれども文書きなし
電光石火
天知る地知る我知る汝知る
天水桶に竜
丁寧も時による
天然つぶてに猪をうつ
天を怨みず人を咎めず
天を敬し人を愛す
椽大の筆
天下は回り持ち
敵もさるものひっかくもの
天高く馬肥ゆる
出船に船頭待たず
天を幕とし地を蓆とす

手があけば口があく
出る舟の纜（ともづな）を引く
寺の隣に鬼が棲む
天に唾する
手酌五合だぼ一升
敵に味方あり味方に敵あり
出かねる星が入りかねぬ
天馬空を行く
哲婦城を傾く
天は自ら助くる者を助く
天は人の上に人を造らず
天網恢々疎にして漏らさず

と

灯台下暗し
冬瓜のお化け
問うに落ちず語るに落ちる
同病相憐れむ
隣の花は赤い
豆腐で歯をいためる
堂に昇りて室に入らず
螻蛄の斧

同工異曲
豆腐に鏝（かすがい）
時は金なり
灯滅せんとして光を増す
年寄りの冷や水
年寄りには家の宝
東奔西走
唐人の寝言
桃李言わざれども下自ずから蹊を成す
登竜門
十日の菊、六日の菖蒲
渡世は八百八品
鳥籠に鶴を入れたよう
取らずの大関
団栗の背比べ
遠くて近きは男女の仲
遠くの親類より近くの他人
所変われば品変わる
道理に向かう刃なし
徒手空拳
泥鰯汁に金鍰（きんつば）
虎は千里の藪に住む
隣の花は赤い

徳を以て怨みに報ゆ
毒薬変じて薬となる
読書万卷を破る まんがん
時は金なり
読書百遍意自ずから通ず
毒を食らわば皿まで
毒を以って毒を制す
怒髪冠を衝く
年には勝てぬ
朋あり遠方より来たる、また楽しからずや
土用の筈
虎の威を借る狐
鳥なき里の蝙蝠
鳥は食うともドリ食うな
凶南の翼を張る
斗南の一人
冬至冬中冬始め
驚馬に鞭打つ
鳶が鷹を生む
時は三月夜は九月
時に逢えば鼠も虎になる
年間わんよりも世を問え
どこで暮らすも一生

飛ぶ鳥を落とす
問い声よければ応え（いらえ）声よい
虎は死して皮を残し人は死して名を残す
泥棒を見て縄を縋う
徳ある者は必ず言有り
時は得難く失い易し
十で神童十五で才子二十過ぎればただの人
飛んで火に入る夏の虫
鳶に油揚をさらわれる
遠きは花の香り
灯心に釣鐘
鳶の子は鷹にならぬ
捕らぬ狸の皮算用

な

泣いて馬謖を斬る
長い物には巻かれろ
七重の膝を八重に折る
名は体を表わす
怠け者の節句働き
蛞蝓（なめくじ）に塩
ならぬ堪忍するが勘忍

生業は草の種
名を竹帛に垂れる
名を取るより実を取れ
南柯の夢
七転び八起き
ないが意見の総じまい
ない子には泣かである子に泣く
無い袖は振れぬ
生木を割く
情けが仇
仲人の嘘八百
なけなしの無駄遣い
鍋蓋とすっぽん
情けに刃向かう刃なし
訛りは国の手形
泣きっ面に蜂
泣く子と地頭には勝てぬ
なくて七癖あって四十八癖
情けは人のためならず
梨のつぶて
長い浮世に短い命
流れを汲みて源を知る
仲立ちより逆立ち

怠け者の足から鳥が立つ
怠け者の節句働き
夏の虫氷を笑う
七度たずねて人を疑え
情けも過ぎれば仇となる
夏歌う者は冬泣く
難波の葦は伊勢の浜荻
爾に出ずるものは爾に反る
何でも来いに名人なし
なぶれば兎も食いつく
生兵法は大怪我のもと
習うより慣れよ

に

人間万事塞翁が馬
憎い憎いは可愛の裏
逃げ逃げ家康天下を取る
日光を見るまで結構と言うな
煮え湯を飲まされる
二階から目薬
握れば拳開けば掌
逃ぐる者道を扱はず

逃がした魚は大きい
苦虫を噛み潰す
女房と畳は新しいほどよい
女房と味噌は古いほどよい
女房は台所からもらえ
憎まれっ子世に憚る
錦を着て夜行くが如し
西と言うたら東と悟れ
二張の弓を引く
煮ても焼いても食えぬ
日計足らず歳計余り有り
鶏を割くに牛刀を使う
似た者夫婦
女房鉄砲仏法
錦は雑巾にはならぬ
二度あることは三度ある
二兎を追う者は一兎をも得ず
女房の妬くほど亭主もてもせず
人参で行水

ぬ

糠に釘

濡れ手で粟
糠味噌が腐る
抜け駆けの功名
盗人に追い銭
盗人の昼寝
盗人も戸締り
盗人を捕えてみればわが子なり
濡れぬ先こそ露をも厭え

ね

猫に小判
根が無くても花は咲く
寝る間が極楽
年貢の納め時
念には念を入れよ
猫に鯉節
年年歳々花相似たり
年々歳々人同じからず
念の過ぐるは不念
熱し易きは冷め易し
猫の手も借りたい
猫を被る

猫に木天蓼（またたび）お女郎に小判

の

囊中の錐
残り物には福がある
喉元過ぎれば熱さを忘れる
軒を貸して母屋を取られる
能書筆を扱ばず
昇れない木は仰ぎ見るな
鑿といえは槌
暖簾に腕押し
後は後今は今
蚤の夫婦
能なしの口たたき
能ある鷹は爪を隠す

は

背水の陣
掃き溜めに鶴
謀り事は密なるを尊ぶ
花多ければ実少なし

話上手は聞き上手
始めに二度なし
敗軍の将は兵を語らず
花は桜木人は武士
花より団子
早起きは三文の徳
白刃前に交れば流矢を救わず
博打と相場は死ぬまで止まぬ
腹も身の内
腹立てるよりも義理立てよ
早合点の早忘れ
花一時人一盛
破鏡再び照らさず
話の蓋は取らぬが秘密
薔薇に棘あり
花は折りたし梢は高し
初めは処女の如く終わりは脱兎の如し
箱根知らずの江戸話
張子の虎
始めあるものは終わりあり
背水の陣
這えば立て立てば歩めの親心
馬鹿を見たくば親を見よ・

馬鹿があればこそ利口が引立つ
恥を言わねば理が聞こえぬ
始めを言わねば末が聞こえぬ
馬鹿と気違いはよけて通せ
馬鹿と相場には勝てぬ
走り馬にも鞭
馬鹿につける薬はない
馬鹿の大足間抜けの小足
莫逆の友
繁盛の地に草生えず
蛮触の争い
腹が立つことは明日言え
腹が立つなら親を思い出すが薬
八十八夜の別れ霜
八面六臂
這っても黒豆
八方美人は頼むに足らず
鼻先思案
腹が減っては戦さはできぬ
腹八分に医者いらず
万卒は得易く一将は得難し
万能足りて一心足らず

ひ

引かれ者の小唄
髭の塵を払う
庇を貸して母屋を取られる
尾生の信
顰に倣う
人を呪わば穴二つ
人を謀れば人に謀らる
髀肉之嘆
火のないところに煙は立たぬ
美人というも紙一重
人を以て言を廃せず
百聞は一見に如かず
人の一寸わが身一尺
人は情けの下で立つ
低き所に水溜まる
人は心が百貫目
瓢箪から駒
瓢箪鯨
必要は発明の母
人の十難よりも我が一難
鼻眞の引倒し

匹夫罪なし玉を懐いて罪あり
彼岸過ぎての麦の肥
火のないところに煙は立たぬ
人は木石にあらず
人は一代名は末代
百里を行く者は九十を半ばとす
氷炭相容れず
蛭に塩
貧すれば鈍する
貧乏難儀は時の回り
火を避けて水に陥る
日を同じくして論ぜず
秘事は睫（まつげ）
貧乏人の系図話
人の振り見て我が振り直せ
人を使うは苦を使う
美言信ならず
火で火は消えぬ
人を見たら泥棒と思え
人と屏風は直ぐには立たぬ
日暮れて道遠し
人の噂も七十五日
人の禪で相撲をとる

貧乏人の子だくさん
人は人中田は田中
一つ穴の貉
一つ迷えば万迷う
人を見て法を説け
卑下も自慢のうち
人は善悪の友による
人は見かけによらぬもの
火に油を注ぐ
膝枕に頬杖
膝とも談合
百日の労一日の楽
人に七癖我が身は八癖
百日の説法屁一つ
瓢箪に釣鐘
人は陰が大事
比翼連理



風声鶴唳
風前の灯
笛吹けども踊らず

富貴は浮雲の如し
覆水盆に反らず
風雲の会
武士は食わねど高楊枝
武士に二言なし
風樹の嘆
刎頸の交わり
付会の説
冬来たりなば春遠からじ
豚に真珠
夫婦喧嘩は犬も食わぬ
夫婦は互いの気心
風流は寒いもの
不俱戴天の敵
河豚食う無分別食わぬ無分別
福德の三年目
夫婦は二世
夫婦暮らしは殿様でも真似できぬ
舟に刻みて剣を求む
俯仰天地に愧じず
武士は相身互い
無精者の隣働き
夫唱婦随

禪欠いても義理欠くな
古川に水絶えず
分別男に稼ぎ女
分別過ぐれば愚にかえる
附耳の言千里に聞こゆ
蚊虻（ぶんぼう）牛羊を走らす
夫婦喧嘩は貧乏の種まき
鼻の宵鳴き糊すって待て
父母の恩は山よりも高く



臍が茶を沸かす
下手の横好き
下手な味方はないがまし
平家を滅ぼすは平家
兵に常勢なし
蛇の足より人の足
下手があるので上手が知れる
下手な鉄砲数打ちゃ当たる
下手の考え休むに似たり
下手の長談義
弁慶の立ち往生

弁慶の泣き所



仏作って魂入れず
仏の顔も三度
坊主の花簪
仏も金色に御衣を更む
坊主憎けりゃ袈裟まで憎い
抱腹絶倒
洞ヶ峠を決めこむ
惚れた病いに薬なし
惚れて通えば千里も一里
煩惱の犬は追えども去らず
坊主丸儲け
細くても針は飲みぬ
骨折り損のくたびれ儲け
誉め手千人悪口万人
仏も昔は凡夫なり
牡丹餅で腰を打つ
仏あれば衆生あり
仏頼んで地獄に墮つる
煩惱あれば菩提あり



蒔かぬ種は生えぬ
眉毛を読まれる
眉に唾を塗る
眉に火が点く
真綿で首を締める
待つ間が花
待つ身よりも待たる身
舞舞螺（まいまいつぶり）も一軒の主
孫を飼うより犬の子飼え
馬子にも衣裳髪かたも
まず隗より始めよ
蝮の子は蝮
待たぬ月日は経ちやすい
学びて思わざれば則ち罔し
祭過ぎてのとちめんぼう
待てば海路の日和あり
丸い卵も切りようで四角
負け惜しみの減らず口
曲がるは折れるに勝る
学べば即ち固ならず

み

身から出た錆
水に油
自ら侮って後人之を侮る
自ら低うすれば即ち尚し
味噌を付ける
見ての極楽住んでの地獄
身に勝る宝なし
三日天下
三日坊主
水心あれば魚心あり
三つ子の魂百まで
耳を掩いて鐘を盗む
見る穴へ落ちる
三つ子の横草履
木伊乃とりが木伊乃になる
身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ
見ざる聞かざる言わざる
水清ければ魚棲まず
見かけばかりの空大名
三日先知れば長者

身知らずの口たたき
水は方円の器に随う
実るほど頭をたれる稲穂かな

む

六日の菖蒲十日の菊
昔取った杵柄
娘を見るより母を見よ
無理は三度
矛盾
娘一人に婿八人
胸に一物
無理が通れば道理が引っ込む
昔のことを言えば鬼が笑う
昔は昔今は今
昔は今の鏡
胸に釘打つ
無常の風は時を選ばず
無芸大食

め

名物にうまい物なし
目から鼻へ抜ける
盲蛇に怖じず
目には目歯には歯
目の上の瘤
鳴鶴陰にありその子これに和す
明眸皓齒
明鏡止水
目から入って鼻に抜ける
名所に見どころなし
名物にうまいものなし
名将は名将を知る
目糞鼻糞を笑う
目の寄る所に玉が寄る
名人は人に問う
名人は人を誇らず
目は口ほどにものを言う
目病み女に風邪ひき男
面従腹背
目八分に見る
牝鳥につつつかれて時をうたう
目は心の鏡
目を剥くより口を向けよ

も

孟母三遷の教え
目睫の間
餅は餅屋
沐猴にして冠す
物は考えよう
物は試し
元の鞘に納まる
元の木阿弥
燃えついてからの火祈祷
桃栗三年柿八年
餅は乞食に焼かせろ
物言えば唇寒し秋の風
物言わねば腹ふくるる
持つべきものは女房
元木に末木（うらき）なし
物は言い残せ菜は食い残せ
物豊かなれば即ち欲省く
物言わずの早細工
物怖れは不案内から
貰い物に苦情

門前の小僧習わぬ経を読む
門前雀羅を張る

や

焼け石に水
焼け野の雉子夜の鶴
安物買いの銭失い
柳の下にいつも泥鰻はおらぬ
藪から棒
病膏肓に入る
焼餅と欠餅は焼くほどよい
焼餅焼くとて手を焼くな
病は気から
山高きが故に尊からず
闇夜の鉄砲
闇夜に烏雪に驚
山高く水長し
宿取らば、一に方角二に雪隠三に戸締り
四には火元
役に立たずの門立ち
焼け跡の釘拾い
夜叉が嫁入り

柳の枝に雪折れなし
柳に風折れなし
藪医者 of 病人選び
病む身より見る目
病は口より入り禍は口より出ず
破れても小袖
やはり野におけ蓮華草
藪をつついて蛇を出す
病め医者死ね坊主
病んで医を知る
夜食過ぎての牡丹餅

ゆ

雪と墨
雪に白鷺
油断大敵
行き駈けの駄賃
行き大名の帰り乞食
幽明境を異にする
勇将の下に弱卒なし
夕焼けに鎌を研げ
雪の上に霜

夢に牡丹餅
柚の木に裸で登る
指汚しとて切られもせず
夢は五臓六腑の疲れ
夢は逆夢
夢の浮橋

よ

欲に目が眩む
弱り目に祟り目
宵越しの茶は飲むな
羊頭を懸けて狗肉を売る
葦の髄から天井のぞく
呼ぶよりそしれ
世は相持ち
良い仲のこいさかい
弱くても相撲取り
世渡りの殺生は釈迦も許す
夜道に日は暮れぬ
嫁を見るより親を見よ
夜目遠目笠の内
世乱れて忠臣を知る

嫁の三日ぼめ
宵っぱりの朝寝坊
楊枝に目鼻をつけたよう
横紙破り
横車を押す
欲と二人連れ
寄らば大樹の陰
酔って本性を顕す
夜露は毒
淀む水には芥（ごみ）溜まる

ら

来年のことを言うと鬼が笑う
楽隠居楽に苦しむ
楽は苦の種、苦は楽の種
洛陽の紙価を高む
落花流水の情
落花狼藉
乱を以て治を攻むる者は亡ぶ
らっきょう食うて口を拭う

り

理が非になる
李下に冠を正さず
利して利するなかれ
竜を画いて晴（ひとみ）を点ず
力んだ腕の拍子抜け
理屈上手の行い下手
龍頭蛇尾
流言は知者に留まる
竜馬（りゅうめ）の躓き
良薬は口に苦し
律義者の子沢山
梁上の君子
良将は戦わずして勝つ
両方立つれば身が立たぬ
両手に花
遼東の豕
陵雲の志

る

類は友を呼ぶ
留守見舞いは間遠にせよ
瑠璃も玻璃も照らせば光る

流浪して主の有難さ

れ

礼儀は富足に生ず
令女の節
礼を過ぎれば無礼になる
烈風枯葉を掃う
連木で腹を切る

ろ

労多くして功少なし
壟断
隴を得て蜀を望む
論語読みの論語知らず
老少不定
蠟燭は身を減らして人を照らす
老婆親切
魯魚の誤り
櫓も櫂も立たぬ
論より証拠
老犬は虚に吠えず

六十の手習い
六菖十菊
六根清浄一根不浄
ローマは一日にして成らず

わ

渡りに船
若い時の苦勞は買ってでもせよ
我が脛に鎌
我が身をつねって人の痛さを知れ
禍も三年たてば用に立つ
渡る世間に鬼はない
笑う門には福来たる
我が刀で首を切る
若気の無分別
若後家の薄化粧
椀作りの欠け椀
我が子自慢は親の常
我が田に水を引くが如し
笑う者は測るべからず
我面白の人困らせ
破鍋にとじ蓋

我が仏尊し
わからぬものは夏の日和と人心
和を以て貴しとなす

いろはかるた比較

	江戸	上方	尾張
い	犬も歩けば棒に当たる	一寸先は闇の夜	一を聞いて十を知る
ろ	論より証拠	論語読みの論語知らず	六十の三つ子
は	花より団子	針の穴から天覗く	花より団子
に	憎まれっ子世にはばかる	二階から目薬	憎まれっ子頭堅し
ほ	骨折り損のくたびれ儲け	仏の顔も三度	惚れたが因果
へ	下手の長談義	下手の長談義	下手の長談義
と	年寄りの冷や水	豆腐に鋸（かすがい）	遠い一家より近くの隣
ち	ちりも積もれば山となる	地獄の沙汰も金次第	地獄の沙汰も金次第
り	律義者の子沢山	綸言汗のごとし	綸言汗のごとし
ぬ	盗人の昼寝	糠に釘	盗人の昼寝
る	瑠璃も玻璃も照らせば光る	類をもって集まる	類をもって集まる
を	老いては子に従え	鬼も十八	鬼の女房に鬼神
わ	破れ鍋に綴じ蓋	笑う門には福来る	若いときは二度ない
か	かったいの瘡うらみ	かえるの面に水	陰うらの豆もはじけ時
よ	葦（よし）のずいから天井のぞく	夜目遠目傘のうち	横槌で庭掃く

た	旅は道連れ世は情け	立て板に水	大食上戸餅食らい
れ	良薬は口に苦し	連木で腹を切る	連木で腹を切る
そ	総領の甚六	袖振り合うも他生の縁	袖の振り合うも他生の縁
つ	月とすっぽん	月夜に釜を抜く	爪に火をともし
ね	念には念を入れよ	猫に小判	寝耳に水
な	泣きっ面に蜂	なす時の闇魔顔	習わぬ経は読めぬ
ら	楽あれば苦あり	来年の事を言えば鬼が笑う	楽して楽知らず
む	無理が通れば道理が引込む	馬の耳に念仏	無芸大食
う	嘘から出た真	氏より育ち	牛を馬にする
み	芋の煮えたもご存じないか	鰯の頭も信心から	炒り豆に花が咲く
の	喉元過ぎれば熱さを忘れる	ノミと言わば槌	野良の節句働き
お	鬼に金棒	負うた子に教えられて浅瀬を渡る	陰陽師身上知らず
く	臭いものに蓋をする	臭い物に蠅がたかる	果報は寝て待て
や	安物買いの銭失い	闇に鉄砲	闇に鉄砲
ま	負けるが勝ち	まかぬ種は生えぬ	待てば甘露の日和あり
け	芸は身を助く	下駄と焼き味噌	下戸の建てた蔵はない
ふ	文はやりたし書く手は持たぬ	武士は食わねど高楊枝	武士は食わねど高楊枝
こ	子は三界の首枷	これにこりよ道才坊	こころざしは松の葉

え	えてに帆を上ぐ	縁と月日	閻魔の色事
て	亭主の好きな赤烏帽子	寺から里へ	天道人殺さず
あ	頭隠して尻隠さず	足元から鳥が立つ	阿呆につける薬はない
さ	三遍回って煙草にしよ	竿の先に鈴	触らぬ神にたたりなし
き	聞いて極楽見て地獄	鬼神に横道なし	義理と禪かかねばならぬ
ゆ	油断大敵	幽霊の浜風	油断大敵
め	目の上のたん瘤	盲の垣のぞき	目の上のこぶ
み	身から出た錆	身は身で通る	蓑売りの古蓑
し	知らぬが仏	しはん坊の柿のさね	尻食への観音
ゑ	縁は異なるもの味なもの	縁の下の舞	縁の下の力持ち
ひ	貧乏暇なし	瓢箪から駒	貧僧の重ね食い
も	門前の小僧習わぬ経を読む	餅は餅屋	桃栗三年柿八年
せ	急いては事を仕損じる	性は道によって賢し	背戸の馬も相口
す	粹は身を食う	雀百まで踊り忘れぬ	墨に染まれば黒くなる
京	京の夢大阪の夢	京に田舎あり	